

南方（ビルマ）

ビルマの助っ人狼部隊

メーカーテラ戦の生き残り

福岡県 有門 三男

福岡県京都郡勝山町大字松田（旧久保村）で、大正十年九月二十九日、農家の長男として生まれた（他に妹二人）。大東亜戦争の勃発二日後、昭和十六年十二月十日、父母、妹に別れを告げ家を出た。当時は御国のため頑張ろう、命は無いものと覚悟、まず門司の老松公園に集合、民家に二泊、朝鮮の竜山の連隊から迎えるの率領者が来ていた。

翌日、輸送船「吉野丸」に乗り門司港出港、海は大

荒れで皆体を横にしているとゴロゴロと転がる。船酔いがひどかったが、その日のうちに釜山上陸、入営先は京城府竜山の歩兵第二十二連隊である。私は第二大隊、第二機関銃中隊である。まず軍服に着替え、宮庭に集合、中隊長の訓示があり、早速軍隊教育の始まりである。

その中隊長は大尉で、その後、破傷風のため片手、片足となられたが、現在も岡山県の温泉郷にいる。当時、既に食糧難であったのであろうが、赤飯が出て入隊を祝ってくれた。

朝鮮の冬は九州と違い寒かった。三日目くらいから本格的な教育となり気合が入ってきた。演習が済むと、古参兵の靴四・五足を磨く。それが終われば洗濯だが、手が凍傷で痛い。今でもまだその跡が残っている。三

カ月で第一期の検閲が終了すると、野戦隊と補充隊とに分けられた。野戦組はニューギニア島へ行き、ほとんどが死んだが、私は補充隊に残された。その間、ラッパ手の修業、ガス兵の修業である。各隊から選抜され、晒粉でイペリットの制毒をやったり、赤筒(クシミ性)、青筒(催涙)ガスの中で、防毒面を被ったり、走ったりである。これは呼吸が苦しくなり、つらいものであったが、若さでその苦勞も突破していた。その後、伝令となり、「公用腕章」を付け営外に出て、娑婆の空気を吸うことができたことは苦しい中での楽しい思い出である。

我々の隊、第二〇師団には大阪の人が多かったが、古兵の多くはニューギニア(朝兵団)へ行き、私は初年兵教育の助手を務めていた。後から入った初年兵の中には同級生もいたが、その時の初年兵はほとんどニューギニアへ補充され、大半は死んでしまった。思えば軍隊は運隊であると今も思っている。

この運は最後まで私に付いてきたものである。昭和十九年五月まで、朝鮮で初年兵教育をしたが、宮崎県

の初年兵に気合を入れ、頭をぶち割るほどの厳しい教育をしたものである。厳しくなければ戦地では生きられないからだと思ったので心を鬼にしての教育だった。昭和十九年五月、我々は硫黄島要員として編成中であつた。出航して宇品沖で一週間いたが、硫黄島方面の援護部隊とのことであつた。しかし、硫黄島は玉碎してしまい。命令が変更された。再命令で南方の戦闘要員となる。

船団を組んで出航した輸送船は途中、米海軍潜水艦の魚雷攻撃や空爆で海の藻屑となつてしまつた。二、三千名が、五、六百名しか生き残れなかつた。しかし、我々は、幸いにも、連合艦隊の南下にともない、それらの軍艦(戦艦「大和」や「陸奥」「長門」、巡洋艦、駆逐艦、潜水艦他)二十数隻に便乗できた。その間は海軍任せの三食昼寝付きで、十七日間後、昭南港(シンガポール)に上陸できた。

シンガポールに十七日間いて、別の船でメコン河を廻り、ベトナム(仏印)サイゴンに上陸。ブノンペンに三週間いて、バンコク(泰)着。いよいよビルマの

モールメン、魔のシットタン河を渡り、トング、ピンマナ、サジ、メークティラと北上し、雲南省で苦戦、玉砕中の第十八師団（菊兵団）の救出作戦に参加するのである。

私の手持っている記録によれば、泰緬国境を通過したのが昭和十九年十月九日である。モールメン着は十一月十日である。これからが、狼の助っ人部隊としての第十八師団ほか撤退部隊の援護作戦参加なのである。

敵の大部隊は戦車を先頭にメークティラから、菊兵団を追って来る。我が狼兵団と菊は交互に援護しながら撤退するのである。敵は食糧と兵器・弾薬を空からも補給を受け我々を圧迫してくる。我々はメークティラとトウマの間の東飛行場への挺身斬り込みを命ぜられた。昼間は戦車と随伴歩兵の射撃や迫撃砲、機銃掃射にやられて動くことができない。

夜になると敵は陣地へ帰って行く。夜襲するのは五、六人で、手榴弾と、缶詰一個、乾パン二個を持って夜陰に乗じて出発する。白い布を後ろにつけ、それを目印として進む。ビルマの夜は真の暗闇である。陣地に

近づくと発見されぬように藪に隠れて、更に夜を待つ。飛行場はピアノ線の鉄条網で囲まれているので、それを切って入ったが敵に見付かってしまった。

夜間行動だから地下足袋で行くのだが、足袋の底がはがれるので紐で縛って歩く。しかし、サボテンの刺がささり痛い。しかし、そんなことはかまっておられぬ。こちらには食糧も武器・弾薬も補給が無いから、敵の自動小銃を奪って使ったこともある。飛行場内の敵から撃ってこなければと思う。しかし、二度とも失敗し、目的は果たせなかった。

私は重機関銃の射手であるから、トウマ撤退までは銃身を一人で担いで行軍した。勿論駄載する馬はいない。一人が脚を、他の弾薬手は弾薬箱を担いで歩く。銃身の重さは二八キロであるから、他の装具や食糧・水筒などを入れると五〇キロを超す。食糧も乏しく、しかもマリアアの四〇度以上の発熱での行軍は身を削る思いだ。「死んでたまるか」の意志と若さでの戦闘と行軍の連続であった。

「M四戦車」に対しては、肉弾攻撃しかない。我が

軍の速射砲は勿論、機銃弾では、はね返されてしまう。補充兵は戦闘にも慣れていないし、訓練も充分でないので、破甲爆雷（磁石式爆雷）を戦車車体にくっつけずに、これを持って戦車に飛び込んだ者もいた。戦車の下敷きとなって戦死である。

次に三月中旬のトウマ付近の我が第六中隊の戦闘について述べてみる。

我が第二機関銃中隊から二個分隊、二銃が第六中隊に配属になった。私は中隊主力の前方、西方から侵入する敵を撃つため、重機関銃用の掩蓋で敵を待ち構えていた。英軍のM四中戦車が随伴兵を周囲に伴って攻撃してきた。

朝から、我が中隊は壕に入って全員配置についていた。私の壕は射手の私と弾薬手の長崎県五島列島出身の向井善五郎である。二人が入れる壕から敵をねらう。戦車の銃眼からも、随伴兵からも我が隊に向かって自動小銃を乱射してくる。私も実のところ青くなったり、赤くなったりだった。戦車は我が陣を蹂躪する。迫撃砲乱射で手も足も出せない。

昼間はモグラ同然、タコ壺の中で頭の上を敵戦車のキャタピラが、縦横無尽。昼は射撃すると我が陣地が分かってしまうので、夜間は陣地変更、又は敵陣地への夜襲攻撃の繰り返しです。しかし、我が軍に武器・弾薬の補給は無い。中には敵の戦車に跳び乗り、戦車の掩蓋を開けて、手榴弾をぶち込み、生きて帰って二階級特進した者もいた。

三月二十日、私はトウマ付近での戦闘の夕方、弾丸が頭の上をかすめるような激戦でした。頭を上げたと、迫撃砲が破裂し破片でやられた。まず右上膊部（まだ破片が入っている）がやられた。このため、私は伏せていたら、また迫撃砲にやられた。破片は骨盤に当たって、肉と骨の一部を削ぎ取った。治療は戦友が傷口に沃度チンキを流し込んでくれたが、傷に滲みて痛いという感覚はあった。

周囲が暗くなり、私は三〇メートルほど走るように這って行ったが動けなくなりました。衛生兵が私を背負ってパゴダ（寺院）まで連れていってくれたが、そこには負傷兵が十人くらいいた。パゴダの下は空洞

になっている。その中は正に阿鼻叫喚という言葉があるが、生き地獄だと思った。傷ついた仲間が、断末魔の叫び声を上げている者もおり、息絶えんとした最期の叫びの者もいる。

夜明け方、バンという音がした。私は朦朧としていたが気が付いて見たら、私の付近に寝かされていた初年兵が、手榴弾を心臓にあて発火させ自決していた。手首が無く心臓が裂け死んでいた。その兵隊は足の関節をやられ「自分はもう駄目だ」と思ったのであろう。

部隊も撤退であるから、パゴダの中にも長くおられず、治療も何もできない状態。二日後に後退するにも、各駅は全部爆撃され跡形もない。水筒・雑囊の中に手榴弾一個、缶詰一個、乾パン二個のみをもって、松葉杖について何十里となく歩いたか分からない。駅も何も無い鉄道線路に沿って行かねば道が分からない、方向も全然分からないのだから、泰緬鉄道に沿って行ったのだ。

ようやく野戦病院に辿り着いた。しかし、病院に収容されても治療も看護も何もできない。傷口に蛆虫が

湧き、その上マラリア二日熱に浸されている。喉が渇き、川へ水を飲みに行ったら、死んでいる兵隊が多く、そこに白い塊が浮いている。よく見ると蛆虫の塊であった。そこで水を飲んだが、上流から死体が何体も流れて浮いている。本当に我々は消耗品だと思った。

インドから転進したのだが、五、六人の患者が集団で行動した。一人では現地人に襲撃され殺され、着ている物もはがされてしまう。そのころ、敵機に発見され銃撃された。千人針の腹巻も取っていた時なので、そのまま逃げた。その後は千人針の腹巻（千人の女性に一針一針、赤い糸を縫い結んでもらった腹巻で、これを巻いていけば弾に当たらぬとの言い伝えのため、今次大戦でも出征兵士の多くは千人針を持っていた）がないので随分心細かった。

その後、鉄橋がやられているので、傷は治っていないが、幅二〇メートルくらいの川の中に入って撤退をした。敵か味方が分からないが銃声や砲声が聞こえる。とにかく、後退しなければならない。マラリアの熱は

また、四〇度を超すが、歩かなければどうにもならない。食物も無いし、熱で食べられもしない。私の体重七八キロは、半分の三九キロになってしまったことが、後で分かった。ちょうど半分になってしまったのだから、いかに体力が落ちていたか分かる。皮膚はカサカサ、マラリアは出る。葉はないわ、傷は治らぬのではどうにもならない。

野戦病院だから、撤退する患者の収容所だ。私は、負傷してから三カ月くらい上を向いて寝られなかった。腕をやられているからである。傷口に銀蠅が卵を生む、たちまち蛆が湧く、その蛆虫を自分の手で取ることができない。自分の肉を食われるのだから、痛い痒い何とも言われぬ。蛆は膿も食うので動くから痛いのだ、痒いのだ。時には軍医も来たし、衛生兵もいたが、ほんどの治療はしてもらえない。

その後、撤退して兵站病院に着いたが、仲間の二、三人は死んでしまった。また、何十人かは現地人によられて死んだ。後退中でも道路沿いに日本軍の兵士が栄養失調で裸体で死んでいる。ようやく、第一線から

ここまで後退し、精根尽きたのであろう。裸の死体は現地人から、衣服その他は剥がされ、剥ぎ取られたためであろう。私も肉体は空、ただ精神力だけで生き抜き、若さで「死んでも絶対生き還ろう」と思っていたから、川にポカポカ浮いている死体を見てそう思った。精神力がさらに湧き生きたのだろうか。年齢も当時二十四〜五歳だったから。

兵站病院で、またマラリアが再発した。マラリア患者の中には高熱のため脳症で、敵の砲に向かって歩いて行く者もいた。六月二十二日、第一二四兵站病院入院、十月二十二日治癒というのが私の軍歴には記されている。

前に申したトウマでの負傷は六月二十日であり、第四十九師団（狼部隊）第四野戦病院入院とあるから、四カ月間、食うに食なく、飲むに水なく、衣服なく、二カ所の戦傷とマラリア高熱と闘いながら撤退していった、終戦後二カ月余で退院となったのである。

終戦を知ったのは八月二十一日であるから六日後に兵站病院で知ったことになる。治癒退院というが、現

在も体の中に迫撃砲弾の破片が残っているごとく、完全治癒ではなくとも退院ということになった。入院中の終戦だが、私は歩けないから使役にも行けなかった。残飯を仲間と喧嘩腰で争って食べた。そうしなければ生きられぬ。まさに餓鬼道に落ちた。食べねば生きられぬからである。

退院はしたものの、我々の原隊の第四十九師団歩兵第一〇六連隊はここにはもういなかった。そのため、雲南省で戦って撤退してきた九州の第五十六師団（龍兵団）歩兵第一一三連隊に転属になった。籍だけで継子扱いではあるが、同じ九州出身者が多く幾分助かった。

籍は龍部隊となろうが抑留、收容所生活に変わりはない。半袖、半ズボン、戦闘帽の有る者も無い者もない。しかし、この服装は日本へ帰るときの晴れ着用で、使役には当時、ドンゴロス（砂糖や穀物を入れる粗い麻袋）で半ズボンを作り、現地人と同じように、大事な所を隠すだけ、肌にはカチカチ刺すようでその感覚は今でも思い出す。全く、人間ではなく犬猿並みの動物

と同じであった。

收容所では、柵内の椰子の木の芯やバナナの幹、現地の芋をアク抜きなどして食べていた。木の実、蛇、蜥蜴など、あらゆる生き物は皆、生きる支えになる。

時には連合軍の残飯を取り合ったこともあった。そのように自活しながら何とか生命を保って帰国を待っていた。

昭和二十一年五月、いよいよ帰国が決まり、連合軍の輸送船リバティーで、二番目にサイゴンを出港した。五月十四日のことである。

神奈川県の浦賀に着いたのは六月二日、西北の方に富士山が見えて、やっと日本に帰ったと安心した。六月三日上陸、五日現役満期、除隊となり復員したのである。そのとき、二三〇円かをもらったと思う。当時は随分多額だと思ったが、貨幣価値が下がっていて値打ちのないことはその後知った。

列車に乗るのだが満員で中に入れない。一時も早く帰りたいから屋根に乗った。神奈川県から九州福岡ま

では随分かかった。駅から田舎道八キロを歩いて帰ったが、家に辿り着いたのは夜中であった。

家では、汽車の煤煙で顔が真っ黒の私を見て、本物かどうか分からなかったようだったが、母は驚いた。

妹二人のうち一人は嫁いでいたが、留守の者は驚きと喜びが一緒にきたような気持ちであったろう。

昔は徴兵保険というものがあり、その外交員に、軍隊手帳、傷病の証明書など書類全部を渡し依頼したのだが、その後その人はどこへ行ったか分からず、勿論保険金も証拠書類一切もついに返ってこなかった。しかし、その人を探すこともできない。何しろ傷の方は後遺症があったので、傷痍軍人の手続をしようとしたが、働かなければならず、何とも傷も生活に支障なしだったので、仕事も休めず（休めば食えなかったから）、とうとう今日までになっている。骨盤は破片で欠けていて、腕の上膊部には破片が入ったままだが、傷病の恩給も恩恵も受けられないでいる。

思えば、私の第四十九師団は混成で、朝鮮の志願兵もおり、補充兵も多かった。しかし、私は若く現役で

あったために死線を乗り越えて現在がある。戦没者やその御遺族のことを思つて、現在も遺族会や恩給欠格者の運動をしている。また、帰還前の部隊長は訓示で「諸君は今日まで忍び難きを忍び、堪え難きを堪え精神力で生き延びてきたのであるから、多くの戦友をこの地に残し、残念ではあるが運良く故国日本へ帰還できたなら、戦後日本の復興のため再度頑張つて欲しい」と言われた言葉はいまだに忘れていない。

我が部隊は狼第一八七〇二部隊であるので「四十九師団Ⅱシジウクヲミテ、百六連隊Ⅱイツモロクデモナイ部隊」と、戦友会の折に言っている。ビルマ、インパール作戦の助っ人狼部隊、メーカーラ戦鬪の生き残りです。